

出張所職員による訪問調査 12月より唐櫃へお邪魔させていただきます。ご協力の程、よろしくお願いいたします。



ごみの減量化をしてみませんか？

今月の広報で特集している「生ごみのたい肥化」を実践してみました。4人家族で1ヶ月間に排出する生ごみの量は6kgありました。ステーションに出せば「ごみ」ですが、堆肥にすることで、肥料になり農作物を育てる「資源」になります。また、すでに町内では何組かのグループが活動しています。今後、出張所でもごみの減量化に取り組みたいと計画しています。準備が整い次第、参加者を募集したいと思っていますので、ぜひともご参加ください。



年末の交通安全県民運動実施中

12月11日(土)から20日(月)まで実施されています。歩行者もドライバーも十分に安全確認をお願いします。

高齢者の交通事故防止

左右を確認して横断しましょう。夜間は明るい服装と反射材を着用 全ての座席のシートベルトとチャイルドシートの正しい着用の徹底

飲酒運転の根絶

飲酒運転をした人、飲ませた人、お酒を飲んでいることを知りながら運転を依頼して、同乗した場合も処罰されます。お酒を飲む機会が多い時期ですので、飲んだら車の運転をしないこと。



冬の寒さが厳しくなってきました。乾燥しやすい時期ですので火の取扱いには十分にご注意を。

【守りたい3つの習慣】

1. 寝たばこは絶対にやめましょう。
2. ストープは、燃えやすいものから離れた位置で使用する。
3. ガスコンロなどでは、そばを離れる場合は必ず火を消しましょう。



あとがき

今年も早いもので、残りわずかとなりました。振り返ってみると、4月からたくさんの方にお会いさせていただき、伝統行事に招いていただきまして「感謝」の気持ちでいっぱいです。また「出張所だより 毎月楽しみにしているよ」とのお声かけは、次への一步を踏み出す励みにもなりました。来年は卯年なので、しっかり領内を跳ね回ります。よい、御年をお迎え下さい(K)

再生紙 100%使用

領内出張所 だより

第7号

平成22年12月15日発行

TEL 77-2001

E-mail ryonai@odaitown.jp

いよいよ今年も残りわずかになりました。

師走ということで、慌ただしく感じますが健康で良いお年をお迎えください。

さて、今回は八知山隧道の特集をしてみました。

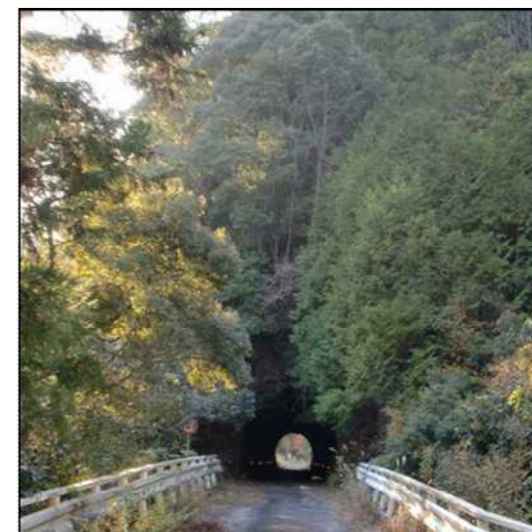
現在の八知山隧道

現在、八知山隧道は平成10年に閉鎖され、大杉方面へ行くには、対岸の県道を迂回しなければなくなっています。

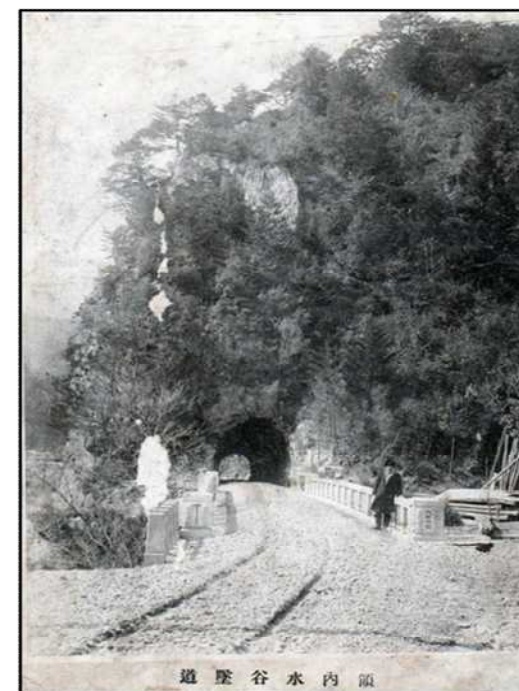
この隧道は大正12年に完成し、大杉谷への交通が初めて開けるようになりました。また、江戸、明治、大正、昭和の四代にわたる貴重な「道」でもあります。

それ以前は、この山の岸壁に細い道があり、生木を掴みながら踵をすらして、慎重に越えることから「カガスリ道」と呼ばれる交通の難所でした。

トンネル入り口の右側には、文化8年(1811年)に建造された道祖神があり、通る人の安全を守り続けてきました。



開通時の八知山隧道



現在のカガスリ道



トンネルの外側の川沿いには、明治時代に造られた道が現在も残っています。



12月号(第7号)の「ペンリレー」は、南にお住まいの大内 壽秋 さんに執筆をお願いしました。

領内に関する自然・歴史・思い出などを書いてみませんか、「領内出張所だより」に掲載させていただきます。

せひともご連絡をください。なお、本文は原文のまま掲載させていただきました。



「おもいで」

私は、大内山生まれで木炭で生計を立てるために、昭和三十一年に大杉へと移住してきた。当時、石油などはなくて、薪や木炭が燃料として貴重なものであった。

そのころ宮川ダムの堰堤は完成していたが、貯水はまだ行っていなかった。同じ年の十月三十日に集中豪雨が発生、雨粒がまるで空から一本の糸のように見えるほど、降り続いた。堰堤の周りには、建設工事の飯場や、まだ移住していない民家が十数件あり、そこに上流から大量の水と営林署が伐採した木が堰堤の周りに流れ着き、しまいには水を堰き止め飯場から民家までを飲み込んでいった。

当時、私の弟は一歳。水に濡れては死んでしまうと思ひ必至で布団にくるみ、小屋のトタンを外してその上に乗せ屋根にあげた。瞬く間に水は小屋の中に流れ込み、ハツとして足元を見ると膝まで水が来ていた。

北岸側で取り残され渡す舟もない時に、自衛隊が到着し、ロープがついた鉄砲を南岸から北岸に撃ち込み、ロープを頼りに南岸にたどり着いた。着のみのまま何も持ち出すことはできなかった。この水害報道は、大きく取り上げられなかった。なぜなら、当時大杉へ行くには徒歩しか方法が無かったからである。

その後、仁衛門にあつた集会所に避難し、何カ月も共同生活をしていた。しばらくして、父ヶ谷の山の高に、小屋をつくり移り住んで炭焼きをしていた。小屋と言っても、樁や樫の木を編んで作った雨風をしのぐだけのも

ので、冬にもなると隙間から雪が舞い込み、蒲団の上に積もっていたこともあった。食事は三食同じで、おかずは漬物だけの貧しく厳しい生活を送っていた。

その様な日々を十年過ごし、久豆の大徳院に家を建て、材木やプラスチック加工などの商売を始めたものの、経済情勢の変化に伴い仕事を続けることができなくなり、昭和五十一年、妻の親戚を頼りに領内の南に移り住んだ。親戚を頼ったのもあったが、人情があつて、住みやすかつたからだ。

年齢が三十代後半であつたが幸いにも、諸戸に就職することができ、このときの採用が諸戸の最後の採用だった。若い作業員とともに下刈りや材木の出し、時には山で火を囲み飲んだこともあった。

また、当時は仕事から帰ってきてから、近所の人たちと色んなことに話の花が咲くこともあったが、今は近くで仕事をする人も少なくなり、朝早く出勤し夜遅く帰る人が増えてきたこともあり、近所の会話も少なくなってきた。昔の貧しく厳しい頃の、人と人の温かいふれあいが懐かしく思い出される。

大内 壽秋

